女性からみた親族

―韓国漁村の人口減少化における女性のネットワーク分析を中心に―

鈴木文子

【キーワード　韓国、女性、親族、人口減少、構築的社会関係】

一　はじめに

韓国は、一九六〇年代からの産業構造の変化に伴い、六五年頃より村落社会からの人口流出が始まる。第一次産業が半数を割ったのが一九七一年、都市人口が農村人口を超えたのが七六年頃で、韓国は七〇年代後半より着実に産業化社会へ移行していく。九〇年には人口の約七五％が都市部に居住しているといわれる。

このような七〇年代からの都市と農村の人口、あるいは産業構造の逆転現象は、九〇年代に入りさらにもう一段深化する。すなわち過疎化現象ばかりでなく、村落の都市化ともいうべき現象が顕著になる。

韓国の離村は、初期には挙家離村より、特に若年層による単独離村の傾向が強かった。また、少子化政策もあって、都市と同様、郡部においても小家族化が進んだ。一九五五年には、全国の平均世帯員数は五.五人で市部、郡部にそれほど差はなかったが、徐々にその差は開き、七五年には市部が四.九人に対し、郡部が五.四となる。しかし、両者の格差は八〇年代後半から再び農村の小家族化によって近づき、九〇年にはほぼ同数（三.八人）となり、九五年には遂に都市（三.四三）と農村（三.二）は世帯員数においても逆転する（統計庁『韓国の社会指標』参照）。また、数値的には都市も農村も核家族とともに一世代家族が増加しているが、都市の場合は、若い独身者や夫婦であるのに対し、農村では高齢の夫婦家族や独居老人世帯が増加する。

若者の離村、その結果招来された農村の高齢化は離農現象も促進してきた。また、住民のほとんどが農漁業従事者であった郡部において、職業の多様化もみられるようになる。交通機関の発達、自家用車の普及、道路の整備などにより都市近郊農村では、ベッドタウン化し、二〇代、三〇代の人々が農村に居住しながら近郊都市へ通勤するという形態も現れる（文玉

杓一九九三、任敦姫・Janelli一九九五）。すなわち離農現象が離村者ばかりでなく村落においてもみられるようになる。

このように九〇年代に入ると、同質的に思われていた村落構造にも多様性があらわれてくる。また、GNPが一万ドルに達し、九七年の「IMF」と呼ばれるバブル崩壊までの経済の好調が、消費文化に拍車をかける。家電製品や水洗式トイレ、風呂場、立式台所を供えた新しい住宅が、行政の主導もあって九〇年代の後半には村落社会にも浸透していく。三種の神器の中でも最も普及が遅かった洗濯機は、九〇年では六四.三％の普及率であったが、九〇年代後半にはほとんど一〇〇％ととなり、統計年鑑からも家電製品の普及率といった項目はなくなっていく。生業における機械化とともに家庭の電化、国民健康保険、年金制度等、社会制度は整えられていくが、生活の中で現金支出も増えていく。

都市化した村落社会の変化は、家族形態、家族観、村落における社会関係にも当然変化を与えるものと予測され、九〇年代に入ってからは農村の家族の変容をあつかった研究が特に韓国において多出する（参考文献参照）。これらの研究の中では、上記のような韓国全体の変容に加えて、いくつかの類似した結論がみられる。ひとつは、これまで長男残留型の直系家族が理念型であったのが、長男の流出によって次三男以下との同居も多くなったこと、また、かつて「家族」の要件は、「血縁」・「住居」・「食事」・「経済」をそなえたものだとされたが（李光奎一九九七:6）近年の人口移動は、このような要件を満たすことが不可能となり、農村社会においては、老人の独居世帯や夫婦世帯が急増し、家族解体が進行しているかのようにみえることである。

しかし、村落に残された老父母と都市の子どもたちの関係は、送金や物質的な援助をお互いに行う点、誕生日や祭祀に集う点では（崔在錫一九八八・本田洋一九九四）、以前の直系家族と変化がないかのようである。現代では、異なった場所で同一の機能を保持する拡張的核家族（extended nuclear family）や拡張的直系家族（extended stem family）が形成されており（李光奎一九九七:85）、家族の解体論は、世帯（家口）と家族の概念を混同しているという批判もある（朴富珍一九九四）。「家族」とは文化的構成原理によって形成される範疇であり、現代の農村社会における「家族」を人々の認識の世界を手がかりに探っている朴によれば、都市で核家族を形成している子どもや村に残された親は互いを「家族（食口）」として認識していることが多く、経済的関係も依然強い。ただし、同一村落内で別居ではあるが、父母や長兄の世帯（大家（クンチプ））と拡大家族的関係をもっていた次三男以下の世帯（小家（チャンチプ））が、お互いを「家族」とみる意識は後退し、別居の父子関係を「家族」と認識するのは、親も子も長男に限定されつつあるという。また、長男とその妻とでは別居の親（すなわち妻にとっての舅姑）に対する認識は異なっており、長男は家族と認識するが、妻は認識しない傾向があるという。このように、家族・親族をどの範疇とするかは、さまざまな文化によって異なる親族原理が存在するように、社会的変化によっても当然変化する。同時にそれは、社会文化的脈絡に埋め込まれた個々の立場によっても異なることが予想される。

また、これまでの「家（チプ）」は、父母の扶養とともに祖先祭祀が長男によって継承され、財産も長男が多くを相続することが当然と考えられていた。しかし、経営体としての日本の「家（イエ）」とは異なり、祖先祭祀の継承がもっとも重要とされる韓国の「家（チプ）」においては、子どもを土地に残し、家業を継承させるという発想は希薄である。農地が相続対象としての価値がなく

なると、投資は教育へ移行し、長子優待不均等相続の習慣に従って、次三男よりも長男に先に教育費が投入された（李光奎一九九七）。長男たちの都市への移動は、同居や祖先祭祀を長子にのみ任せることが不可能となり、財産相続や管理にも変化をもたらした。長く親の面倒をみた末子や、近隣に居住し実質的に親の世話していた婚出した娘に財産が任される事もある（任敦姫・R.L.Janelli一九九五）。もともと日本に比べて韓国は、実生活における居住と、財産、祭祀継承の単位にずれがあることは指摘されており（嶋一九八〇、末成一九八四、本田一九九八）、その潜在的要素が近年実生活に近づいてきたといえる（注1）。

次に最近の研究で多い論調は、家族の解体ならぬ、村落における親族関係の弱化である。親族間のネットワークに関する研究は極めて少なく、またその研究は祖先祭祀を中心にしたチバン間の研究に集中しているが、儀礼や相談ごと、生産活動など日常生活に焦点をあてて調査したものに崔在錫（一九七九・一九八八）の研究がある。後に詳述するが、崔は近年血縁的紐帯は弱化し、農村の社会関係は、地縁によって代置されていると述べている。これは三つ目に共通する論調、農村社会において女性の労働時間が増大し、またその女性が労働人口不足の村落社会において、労働力供給の要となっているという指摘（文玉杓一九九三・趙玉羅一九九二・金周淑一九九四）と脈絡を同じくする所もある。筆者も漁村の生産活動の中で女性の重要性を指摘したことがある（鈴木一九九八）。ただし、筆者は崔と異なり、むしろ女性を中心とした親族のネットワークが、労働力供給に大きく寄与していると述べた。

本論では、これらの先行研究の知見も踏まえながら、主にこれまであまり研究のない女性と親族の関係について、社会経済的側面を中心に事例漁村を考察する。特に、人口減少のなかで、生存戦略的に新たに構築されていく親族のネットワークが女性によっていかに展開されているかに関心をおきながら分析していく。

本稿に於いて用いる資料は、一九八九年～一九九〇年までの約一三ヶ月における現地での住み込み調査とその後九八年まで続けられた補足調査の資料をもとにしている。また、最初の調査に於いては特に女性のネットワークに関心をいだいて行ったものではない。しかし、キーインフォーマントたちの生産の場や遊びや儀礼の場に遭遇する中で、非常によく似た人間関係の反復に気づきそれらを、他のグループにおいてはどうかを聞き書き調査したものである。また、数年後の村落での人間関係の変化もひとつのデーターにしている。特別な記述がないかぎり、数値は九〇年現在のものである。後日の変化については、別稿に改めたい。

表１　世帯と人口の推移

	世　帯		人　口			
年	世帯数	指数	総数	男	女	指数
1966	61	100	432	―	―	100
1971	63	103	414	206	208	95.8
1976	69	113	447	225	222	103
1981	77	126	393	192	201	91
1986	81	132	352	185	170	81.5
1990	80	131	347	178	169	80.3
1994	83	136	287	156	131	66.4
1997	85	139	281	144	137	65

Ｐ都市　統計年報より作成（指数は66年を100とする）

二　調査地の概要

（一）人口動態

まず、本論にはいる前に、本稿で扱う事例村落の概要を述べておく。Ｃ島は、忠清南道Ｐ郡（現在のＰ市）に属す、西海（黄海）の離島漁村である。面積一二七ヘクタールの島は、一自然村からなる。二〇世帯の純農家を除いては、多くの世帯が漁船によるイリコ類や、エビ漁、板目鰈などの雑魚の漁、海苔の養殖を主たる生業とし、あるい

はその被雇用者として生計を立てていた。また、女性は農家も漁家も関係なく、作業がないときには塩辛のもととなる貝の採取をして、重要な現金収入を得ていた。

C島の世帯及び人口の変化は、表1の通りである。人口は、七〇年代後半から八〇年代前半までに一三％減少し、九〇年から九四年の間にさらに一四％ほど減っている。七〇年代後半から、八〇年代はじめの変化は、男子の高校進学や女子の中学進学率が上昇することで、若者の流出が顕著になってきたことが考えられる。また、九〇年現在、島に居住している世帯のなかから、転出している各々の家族成員（但し島には小学校しかないため、他地で在学中の学生は除く）を計算すると一〇三名で、ほとんどが一〇代後半から二〇代であり、C島においても、単身離村が顕著であった。また、九〇年代後半は、男女とも高校、専門学校、大学へ進学するのも一般的になり、若年層の流出が加速化されている。しかし、一九九〇年の全国の一五歳～二九歳の青年が農林漁業従事者に占める割合は、六.九％であるのに対して、C島では一七.三％である。また、世帯や人口に関しても、近年報告されている他地域の動態と比較して、C島およびその近隣の島嶼漁村の傾向は、特殊なケースであると思われる。C島の漁業の特殊性が、例外的な傾向をもたらしていると考えるべきである（注2）。

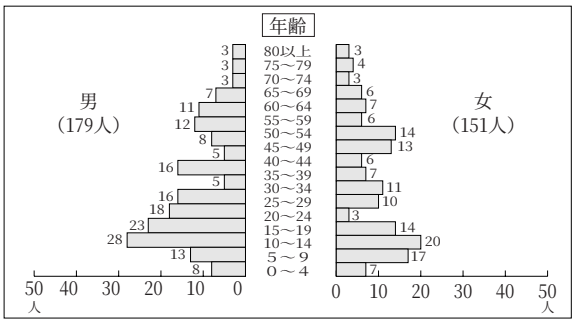

図1　年齢階級別人口（1989）

年齢階級別の人口構成は、図1のとおりだが、このうち一三歳から二九歳までの九九人のうち、七三人が学生で、実際は島外に暮らしていた。それ以外は、学校をドロップアウトしたり、資金づくりのために一時的に漁業に従事していた者である。また、女性は、陸地の中学を終えると戻ることもなく、就職し結婚している。二〇代は二人を除いて既婚者である。六五歳以上人口は、七.六％と農漁村においては低い方であるが、当時の全国平均五.一％よりはやや高い。また、七〇年代に比べて一五歳未満の子どもの構成比も半数近くに減少している。若年層の流出により若い夫婦を中心とした核家族が形成されていないことと、家族計画事業による少子化の影響と考えられる。

表2　世代数別世帯　　1990年　単位％

世代構成	全　国	都市郡	郡　部	C　島
Ⅰ世代	12	10.7	15.9	16
Ⅱ世代	74.1	77.3	64.5	60
Ⅲ世代	13.6	12	19.7	24

統計庁：『韓国の社会指標』2000より作成

（二）世帯

表2、表3は、C島の家族の世代数および家族類型と全国の平均を比較したものである。C島では二世代や核家族が全国及び市部平均より低くく、郡部平均よりやや高い。また、三世代の家族は平均よりもかなり高い。郡部の平均に比べ、単独世帯の占有率は非常に少なく、一方直系家族を含めた拡大家族は、他地より割合が多く相対的に大家族の比率がやや高いといえる。

具体的に現在居住している家族には、どのような成員が残っているのだろうか。まず、世帯主で出生順位がわかっている六八世帯中、長男が四二世帯、

表３　家族類型別世帯構成　　1990年　単位%

世帯構成	全国	市部	郡部	C島
単身	9	8.55	10.02	3.7
夫婦	8.3	6.65	13.65	12.5
夫婦+未婚の子女	51.92	55.08	42.67	45
片親+未婚の子女	7.83	7.96	7.45	11.3
直系家族	9.18	7.62	13.96	18.8
拡大家族	12.31	12.54	10.9	8.8
その他	1.46	1.6	1.07	0

残りの二六世帯は次三男以下であるが、この内長男に当たる世帯が同じ洞内（村内）に居住していないのはわずかに四世帯である。これらの数値からみると、C島も一見韓国の慣行にしたがって、夫婦家族→未婚の子女と夫婦→長子の結婚後同居→次三男も結婚後同居→長男を残して他が分家→長男残留型の直系家族という一般的家族周期を経ているように見える。しかし、三世代家族一九世帯中（直系一五、拡大四）、長男と同居しているのは九世帯で、長男が洞内に居住していながら、次男以下と暮らしている世帯が六世帯ある。また、最高齢者が死亡したため、あるいは母親が再び長男の所へ戻ったため、現在は核家族になっているが、かつて親と同居していたという次三男以下のケースを入れると一一ケースになる。C島では、本来は長男が残ることが理念型であると考えられている。しかし、実際は自らの生殖家族が多くなったものから独立することも多いという。従って子どもが早くできる可能性の高い長子の夫婦から世帯を分けることも多い。また、このような家族の分居の仕方は、六〇年代以降の人口移動による変化だけではない。

例えば、姜Y氏は、一九三四年生まれであるが、父親は三男であった。物心ついてからは、祖父母・父・父母の兄弟とその家族と暮らしていたという。長男夫婦が内房（アンバン）、次男が真ん中の部屋、末子夫婦が隅の部屋を使用し、祖父母がアレチプといわれる別棟の部屋（サラン房）に居住していた。姜さんの家では、まず長男のオジが分家し、次に三男である自分たちの家族が出て、次男のオジが祖父母と暮らしたという。姜さん本人も、弟妹が五人いるが、最初に次・三男が他出し、上の妹が婚出、次に自分たちが四人の子どもをもうけ分家し、下の妹が出嫁、一七歳離れた末弟夫婦が現在母親と暮らしている。ここでは、日本の漁村や土地の零細な地方で報告があるような末子相続や選択相続的である。しかし、正確には相続の問題ではなく、単なる同居の問題にすぎない。親との同居については、C島では比較的以前から、住宅事情（三間の一列型住居が典型）や親の意志によって自由に選択されている傾向があった。また、残った片親がそのまま次三男以下で亡くなることもあるが、その際は、喪明けが終わった時等に（あるいは数年を経ることもあるが）、忌祭祀は最終的には原則通り長男の所へ戻される。

しかし、時代によって最も変化しているのは、財産の継承である。朴S氏の場合は、長子が分家後も一〇年以上次子が弟たちや母親を扶養しているため田畑に関しては、次子が最も多くとり、次子の半分程度を現在長男が受け取っている。C島では原則的には長男が財産の半分を継承し、親と長く暮らす可能性の高い末子にも多く分配されるといわれるが、二〇年代生まれの姜Y氏や片M氏は別居した長子が、ほぼ同等かやや多く継承しているが、四〇年代生まれ、六〇年代後半くらいに分家している朴S氏は、実際の扶養の形態と呼応した形で配分されている。片J氏（一九三九年生）の場合も、一九六五年に次兄が他出したため、両親や病弱な長兄の面倒をみるため戻ってくる。陸地には、六二年に軍隊終了後、公務員をめざして出ていた。七八年に妻を伴い次兄は戻るが、八一年に分家して現在も洞内

に居住している。しかし、田畑はほとんど片J氏が継承している。六〇年にこれまでの中心的生業であった大型の中船ペーによる漁業が廃止になり、この時期から村の男性たちは、仁川、釜山などへ出稼ぎに行き始める。七〇年頃より新しい漁が安定し始め、一旦男性達は戻ったが、良い条件の職が見つかるまで島との往来を繰り返すという若者も増え出す。この不安定な定着性が、これまで親の扶養にそれほど影響がなかった同居・分居の差異を実質的な財産分与に移行させる原因になっていると考えられる。また、島内でも実質的な分与になっているということは、生業が個別経営的になり、教育費等の支出も増え、それまでの大家（クンチプ）と分家した小家（チャンゲンチプ）との相互依存的な関係にも変化を来していることを示すものと思われる。都市への若者の流出によって、長子残留の形態が崩れてきたことは、全国的な傾向であることは先にも述べた。村落の中でも経済活動においては、表面的には家（チプ）の分化が見られる。

一方家（チプ）の分化は、兄弟だけでなく父子関係にも起こっている。村内で息子と別居したまま暮らす高齢の夫婦のケースも出てきている。長男が先に分家したため、次三男以下と暮らしていたが、次三男が他地へ移転したために老夫婦のみが残ったものである。しかし、同居していた高齢の両親を残して島内で分家した世帯も一世帯ある。両親はいずれも七〇代後半である。また、九八年には嫁を連れて戻った三〇代の男性が母親と最初から同居せず、憤慨した母親が他地へ出ていってしまった事件や近郊の都市でアパート暮らしをしながら、漁撈期に島にきて漁をするという生活形態もあらわれてきた。任敦姫とジャネリー（一九九五）の論文にも、近隣都市から親元の農園に通う息子の事例が紹介されている。子どもは、いずれ両親のうちどちらかが死亡したり、あるいは病気になれば同居しなければならないと考えてはいるが、これまでのように、職場が都市に移行したために、別居を余儀なくされたというケースとは異なる。村内からみると同居をすべきという意識自体が、村落社会でも弱化しているように思われる。

一世代家族は、この老人世帯も含めて一三世帯、内十一世帯が世帯主の年齢が五十代以上、九世帯が夫婦世帯で、独居も二世帯ある。独居の五〇代は近年子どもが独立して他地へでたもの、六〇代は、未亡人で息子は村外におりひとり娘が洞内（村内）に嫁いでいる。六〇代以上の夫婦世帯が六、うち三世帯は、娘のみで息子がおらず、そのうち二世帯は、ひとり娘が洞内に嫁いでいる。これらの老人世帯では、子どもが村内にいる者は、子どもから米やキムチなどの基本的な食料を受けていたり、遠方のものは送金もあるが、定期的な収入とは限らない。生活保護を受けている人もいる。また、村内に子どもがいても生業に忙殺される今日では、毎食面倒がみられるわけでもない。高齢の女性たちも、おかずにバラエティーを加えるため、海草や貝の採集に出かける。商人に卸せば現金収入にもなり、この女性による最低でも月三〜四万の収入は、村落で生活する老人世帯には貴重な収入であった。還暦をすぎれば、働かないことが当然とされていた村の老人も、市場経済が浸透し、労働時間が増大した漁村においては、子どもの学費を稼ぐために必死な息子や嫁に甘えてのんびりすることは後ろめたい時代でもあった。一方女性にとっての貝とりは、幼いときからの習慣でもあり、時には楽しみでもあるのだが、近年は七〇過ぎた男性たちも牡蠣をとったり、息子の海苔の養殖の手伝いもしている。「働かなかったら、ご飯を食べさせてもらえない」「高麗場（韓国流姥捨て山）に捨てられる」と冗談をいう老人もいるが、彼らがあえて同居をしないのは、このような気兼ねもあった。環境の異なる都市で子どもと同居することを拒否する老

人たちとは、若干異なる理由が村にはあった。

一世代家族のうち、ここでは二十、三十代の若い夫婦世帯はない。二十代の単身者は、船員として一時的に滞在したものである。

三世代家族の場合、十九世帯中十二世帯は、三十代の働き盛りの息子夫婦と同居していた。一方、二世代の核家族のうち半数の二十三世帯が世帯主が五十代以上で、すべての世帯が定着の可能性が不安定な未婚の十代〜二十代の子の親たちであった。したがって、九十年現在の状態は、高齢者世帯が増える過渡期の状態ともいえる。ちなみに、約十年後の九十八年では、独居や夫婦家族は約一六%から四十二%に急増している。

(三) 親族のネットワーク

これらの世帯は、どのような親族の中に暮らしているのであろうか。韓国には、祖先を同じくするひとつの父系親族集団が村の大半を占めている同族村落と、複数の姓氏が混在している各姓村落がある。島はおもに浙江片氏、晋州姜氏、密陽朴氏の三姓から成り、各々二一、一四、一三世帯を占める。入村祖は、各々八代〜九代祖にあたる。各氏族は一〇月に五代祖以上の祖先を共同で祀る時祭を行っており、そのための資金を捻出する一族の水田（宗中沓）も所有している。ただし、田を購入したのは、片家は七〇年頃、朴家は八〇年頃で、それまでは輪番で準備をしたという。また、家系を示す族譜は、ムラで中心的な家が各氏族一冊ずつもっていたというが、他地へ引っ越したため、片家、姜家では現在全世帯で所持するようになった。片家は、一九四八年版から複数の家が所持するようになったが、姜家は八〇年頃に全世帯が購入している。いずれも村外の親族会である花樹会と接触したことによって普及したものであり、内発的なものではない。また、村では由緒ある同族村のように始祖や入村祖の直系子孫である宗家、宗孫意識はみられない。どこの家が宗孫であるのかということも老人達の間でも認識されてはいない。

このようにみると、祖先祭祀に代表される父系親族集団は、両班社会をモデルとした理念型として、島では極近年組織化されてきたもののようにみえる。しかし、片家などは一九二〇年頃より親族が多くなったため二つの「派」に別れて時祭（当時は百屯）を行うようになったという。形式はともあれ、父系出自集団が祖先祭祀を一体化しておこなうという行為そのものは、C島のような庶民のなかでも少なくとも植民地時代が始まる頃には浸透していたことがわかる。また、時祭の際の儀礼や飲福（直い）の場や、父子間の相互行為をみていると、儒教的な長幼の序による緊張関係や「一家（イルガ）」としての一体感もみられる（注3）。しかし、村にはいわゆるオルンとして威圧感を他姓にまで及ぼす長老はいない。各姓氏間の関係は、非常に平等なものである。

また、日常生活において、村落内の父系親族間のつながりがそれほど密接なものではないことは、同族村落を始め多くの民族誌ですでに伝えられているとおりである（金宅圭一九六四、崔在錫一九七九、金周姫一九九二）。親族同士でも忌祭祀や時祭くらいが、年齢を越えたつきあいが行われる場である。年齢差は、とくに年下の者には気詰まりなものであるので避けられる。日常男性は、同年齢集団が親しい存在であり、年齢の離れた他姓の者と親しくつきあうことは更に少ない。「同年齢の親族が最も親しい存在である」（R.L.Janelli&D.Y.Janelli一九八二）といわれるように、年齢が近ければ接触の多い四寸（いとこ）は親友にもなる。どの範囲の人と親しくなるかは、親、特に母親、あるいは祖母がどの範囲の人とつきあいが密接で、

往来がいかに頻繁にあるかによって変化する。子どもはいつも母親に連れられて行動し、あるいは母親のネットワークの中で預けられるからである。学校教育が浸透していない時代の影響はさらに大きい。

しかし、これはとくに男性の方にあてはまることで、女性同士の場合、年輩者に対する緊張関係は、舅姑やシヌイ（夫の姉妹）に対してはみられるが、他者に対しては男性より希薄である。男性同士の場合は、年齢差による契は形成されることはないが、女性の旅行契は、あらゆる年代の女性が加入している。女は結婚すれば、婚家のあらゆる年齢層の人とつきあわなければならず、自然にその年齢の幅も広がっていく。また、女性の社会関係は、婚姻によって実家にいた時のものとは異る、全く新しい関係を結び直さなければならなくなる。男女によって、その社会関係の作られ方に差異がみられる。

現在の居住者の各父系親族間の関係をみると、朴氏は、中心世代の四代祖から別れている七寸（親等）内の親族が固まっている。片氏一族は、中心世代からみて八代祖（八代前の祖上）の三人の息子の子孫であり、離れたひとは一七寸になる。姜氏も一三寸離れている。比較的近しい八寸内の村内居住の親族関係をまとめたものが、表4である。また、C島は、既婚女性のなかの三八·六％が島内出身者であり、多くの女性達にも自らの父系親族がいることになる。村内婚率は、ブラントの半農半漁の村（V.Brant一九七一）の二二·四％、金宅圭（一九六四）の同族部落内の非同族における二〇·四％よりかなり高い。年齢別にみると二〇代は都市で村外出身者と結婚するケースが増えている。一方、村内婚は六〇代以上よりも、むしろ五〇代以下の方が多い。既婚者中三〇代～五〇代までは村内出身者が各九人ずついるが、六〇代以上は二五人中、六〇代三人、七〇代四人の七人のみである。村内婚も朝鮮戦争や戦後の動乱に関係があるのかもしれない。

これらの三氏のほかに、異なる二派の朴氏が五世帯（各二、三世帯）、金氏三世帯（いずれも非親族）などが居住するが、この内姻戚関係が全くないのは、漁船の被雇用者として入村した崔、韓、田、宋の四世帯とキリスト教の伝道師の一世帯の計五世帯のみである。九〇年現在、崔氏は入村して一〇年たつが、他は二～三年である。九八年には、内三世帯はすでに転出していた。

表４　主たる３姓氏の村内における親族の範囲　　単位：組

	片　氏	朴　氏	姜　氏
父　子	1（2世帯）	0	1（2世帯）
父　娘	0	0	2（4世帯）
兄　弟	4（9世帯）	4（9世帯）	3（6世帯）
兄弟姉妹	5（12世帯）	6（16世帯）	5（11世帯）
叔父・甥	3（8世帯）	1（4世帯）	1（2世帯）
姑母・甥姪	2（4世帯）	2（7世帯）	2（4世帯）
四　寸	4（13世帯）	2（6世帯）	1（2世帯）
五　寸	0	0	1（3世帯）
六　寸	0	1（4世帯）	0
七　寸	0	2（11世帯）	2（6世帯）
八　寸	0	2（7世帯）	3（11世帯）

備考：崔在錫（1988）231p.をモデルに作成
父子1（2世帯）は、父子関係の世帯が1組2世帯であることを示す。
9寸以上は省略。

（四）土地所有者

表5は、C島の世帯を土地所有者と生業の種類を主軸として分類したものである。田畑の所有者と非所有者の間には、はっきりとした相違点がある。すなわち島出身者と他地出身者という違いである。土地所有者のうち、他地出身者は、入村三〇年になる妻家サリ（妻方の村落に居住している者）の一世帯（類型A）のみで、他はすべて島内出身者である。逆に土地を所

有していない二四世帯のうち、十世帯（Eの二、Gの一、Hの七世帯）は他地出身者であるが、そのうち五世帯が妻家（チョガ）サリである。残り十四世帯は島出身者であるが、うち四世帯はC島出身者の未亡人（類型H）、別の三世帯は親の代に一度他地へ出て戻ってきた者、三世帯は一度他出して他の兄弟が農地を所有している。別居している子が土地を所有している場合も二世帯ある。島には漁撈期になると船員として雇われて滞在した人が毎年一〇人から二〇人くらいはいた。しかし、現在の居住者では、先にあげた四名のみで、島内の女性と結婚して居住している人も二人と少ない。入村したのもわずか数年前の人が多いことを考えると、何らかの縁者がいない限り島には定着しないようである。特に六〇年～七〇年代の動力船や共同養殖の始まりとともに、漁業権の獲得が入村三年以降のものに限定されたことも要因と思われる。

表５　生業の諸類型　　単位：世帯

生業／船	漁撈の種類	田畑あり	田畑なし
船所有	シルチ	A19（23.8%）	E４（５%）
	漁	B７（8.8%）	F１（8.8%）
	その他	C６（7.5%）	G４（５%）
船無	無（内海苔養殖）	D24（30%）（8）	H15（18.6%）

村落居住者の特徴として、一般的に四〇、五〇代以上ですでに転職の機会を失っている人や、低学歴の人が多いといわれるが（崔在錫一九九八:232～233）、C島でも同様の傾向がみられる。しかし、低学歴というのも当時の平均からすれば五〇代以上の人には当てはまらない。ある年代までは、島で充分生活できる人が残っている。第一次産業を敬遠する傾向は島でも同様であったが、東海岸の漁村では、浦項や蔚珍のような工業地帯に若い労働人口が吸収されていった感があるが、C島にはそのような雇用地が近辺にはなかったこと、農業に比較して、七〇年代以降からC島の漁業が高収入を得るようになっていたこと等が、人口流出を抑制していたところがある。ただし、中学へ進学するようになった女性は、他地に出ると貝採りしかできない島には戻ることはなかった。初期の工場労働者に多くの女性が吸収されていったことも関係があると思われる。また、現在残留の住民は、必ずしも下層ではなく、比較的何世代も居住して田畑の所有規模などが大きい者が多い。「農業の上層にある家は、漁業においても上層である」といわれるが（朴光淳一九八〇:210）、C島の場合も収入が大きい漁船漁業を経営しているのは、圧倒的に土地所有者に多い。しかし、その経済的差異が拡大したのは、六〇年以降の大型漁船を喪失した時代からであると思われる。島ではそれまで、稲作はほとんど行われていなかったという。

表６　生業類型別平均世帯成員数と労働成員数　　単位：人

生業類型	A	B	C	D	E	F	G	H
世帯成員数	5.3	5.7	3.1	3.1（5）	4.5	3	3.8	2.7
労働成員数	3.4	3	2.3	1.8（2.8）	2.3	2	2.2	1.8

D類型の（　）内は海苔養殖者

（五）漁業従事者

しかし、九〇年代においては、漁船漁業は農地の非所有者も始めることは可能であった。Eに属する一世帯は八十八年頃に入村し、被雇用者として働いた後、九二、三年頃からは独立して漁も始めていた。それでは、どのような家が漁業を行うのであろうか。

表6は、表5の各類型の世帯成員数と労働成員数の平均値を示したものである。世帯員数には、扶養している他地で就学中の子どもも含めている。労働成員は、男女含めて実際に現在労働に関わっている人を計算している。表6からわかることは、収入の多い漁業に従事しているのは、比較的世帯員数も多い、扶養すべき家族が多い人たちである。

類型A、Eは、最も高収入を得れるシルチ（いりこ類）や板目鰈、その他の雑魚をとっている。B、Fはシルチ以外の漁を行っているもので、Bには漁とともに仲買をしている水産業者も含まれる。しかし、自己資金で行っているのはA、Bである。Eは船員として被雇用者になることもある。Gは被雇用者三、商業一である。土地も漁船もあるが漁を行っていない類型Cは、以前漁船を経営していた息子たちが転居や死亡して父母や女性だけが残った家である。ABCには、農業を主としている世帯も各一ずつ含まれており、また、Cの一世帯は最も豊かな層に属している。Dはほとんどが、子育てを終わった農業を主とする五十代以上で、一六世帯はすでに子どもが独立した家である。二四世帯中四十代は二世帯、三十代以下が四世帯で、このうち漁村契、里長、雑貨店経営者各一世帯は農業以外も兼職しているが、他は頼まれれば船員にもなる。

また、シルチや漁撈以外にまとまった収入になるのが、海苔養殖である。類型Aは、十九世帯中十五世帯、Bは七世帯中六世帯、Cは一世帯、Dには八世帯、Eが三世帯、Fに一、G二世帯、Hで四世帯が行っている。いずれも、就学中や未婚の扶養すべき子どもがいる世帯が多い。特に、船舶のないDの中で海苔をしている世帯だけで計算すると、世帯員数も労働成員数も多くなり、E、F、G、Hでも海苔を行っているのは、子どもを扶養する必要がある人がほとんどである。逆にいえば、学資を出したり、独立させるべき子どもがいなくなれば、生活費のためだけに重労働の漁業や海苔の養殖をする世帯はない。経営者になって貯蓄をするということもない。

次に、収入の多い漁業ができるかどうかは、労働力の有無が大きな分かれ目となっている。漁船漁業を行っている家は、世帯員数と同時に労働成員数も多い。仲介の水産業者から契約金を受けて漁を始めることができるため、資本はそれほど問題ではなかった。労働力とは、基本的には世帯に精力的な漁師がいるかということでもあり、女性の労働成員はいても男性が体が弱いために漁を行わない家もある。乗船するのは男性で、陸地で乾燥作業をするのは女性や老人である。しかし、シルチ漁や海苔養殖は天日で乾燥させ、袋詰めにしたり、一枚一枚台紙からはがして束ねたり、細かい作業が必要であり、船員の確保と同時に作業員の確保がC島では重要であった。以下では、労働成員の確保と親族の関係について考察する。

三　ムラにおける親族の機能
―日常生活から見た世帯と親族―

崔在錫は、一九七八年と八八年に村落における親族関係とその機能について調査している。彼は、社交関係（平素の訪問と会話・共食）、生産活動（農作業・農牛、農具の貸借）、家事協助（相談・金銭の貸与・大事における食器の貸与）、儀礼的関係（冠婚葬祭・誕生日・正月の挨拶・病気見舞い・忌祭・名節の参加あるいは扶助）において、村落内に父系親族のみがいる場合、父系、母系（妻系を含む）の両方の親族がいる場合、父系が存在せず、母系（妻系）のみ存在する場合と分類し、どのように変化してく

るかを数値で示している。

七八年には、アンケートの結果からつぎのような指摘をしている。村落内に父系・母系あるいは妻系が存在する場合には、父系に劣らないくらい、母系、妻系の親族に対しても親族関係が強化されており、現実生活に対する機能、すなわち生産活動や家事協助に関しても活発である。一方、父系親族のみ居住する場合でも、社交、生産活動、家事協助の関係については、六寸・七寸位が境界となりそれ以上は弱い。特に、生産活動は、兄弟か伯叔父間の最も近い血縁ぐらいが強い関係とされる。また、親族の居住地も大きく関係しており、村外にいれば父系、母系ともその関係性はすべてにおいて弱くなる。ただし、儀礼機能は村外でも維持されているという。

一方、八八年においては、村落内の父系、母系（妻系）親も社交と儀礼関係がその核心であって、家事協助も父系の一部にあるのみで、生産協助に関しては全く村内ではみられないという。親族であるから相互扶助を行うのではなく、同一規模の農地を所有している者同士が行ったり、家事協助も親族より近隣関係によって行われているという。また、村落外の父系の近親よりも、同一村落内の遠親がより機能的関係を結んでおり、「血縁的紐帯が、地縁的紐帯によってその機能が代置されるといってもよい」（崔在錫一九八八:252）と述べている。崔在錫の調査は農村であり、筆者の事例は主たる生業は漁業である。また社会関係は、人口減少やそれに伴う年齢構成のバランス、その他ムラを取り巻く諸条件によって当然差異が生じることは予測できるが、ここでは、前節の家族によって営まれる漁撈活動やその他の村落における社会関係が、崔在錫が設定した諸条件（父系のみ、父系・母系の共存、母系のみ・両系とも存在しない）を前提にどのように成立しているか、各々の事例から検討してみようと思う。

（一）漁撈と家族・父系親族

先にも述べたように、島で今日漁業を営んでいる世帯は、世帯内の労働成員も多い。類型Aで船員が息子であるのは、一九世帯中一二世帯である。六〇年以前の大型船の時代には、親子や兄弟が伴に乗船することは避けられたという。遭難事故にあって、祖先祭祀をするものがいなくなることを恐れたためである。また、当時の人口と船舶数を計算すれば、余剰人口もあり、家族が同船せずに操業することは可能であった。しかし、今日では、祖先祭祀よりは、人口も不足し、かつ現在の船は二人いれば事足りたので、息子がいればできる限り息子と行う。数人いれば兄弟をみな呼びよせて操業することもある。船員に支払う給与を節約できるため家族経営にした方が効率が良いためである。また、雇用者と同じように、息子に給与分を渡す場合でも、息子に支払われた金額は支出とは考えない。給与を払うことで手元に残る金額は同じでも、息子の使用したものはマイナスとは考えないのである。正確にいえば、漁のために息子を呼ぶのではなく、息子達がいるので漁をするのである。漁の目的は島の生活のためではなく、あくまでも子どもの学費や都市への独立資金を貯めるためである。一般的に親子であれば、その収入はほとんど親が一括して管理するが、その変わり親が都市にアパートを買ったり、店を開かせたりと独立資金を与えることも当然と考えられていた。

片H氏には息子が五人いるが、次男が島に残り漁業を専門としている。ソウルに住む既婚の長男や未婚の三男、末子もシルチ漁の時期になると戻って二隻の船で漁を手伝っている。他地にいる息子達は、この島の典型的な若者の生活パターンを過ごしている。片氏は、学歴が低い息子達（小卒・中卒）が、ここでは力を合わせればいくらでも金を稼げるという。将

来は、ソウルにアパートでももって、各々が暮らせばよいと思っている。都市の方が勉強もできるし、島が若い息子達が一生暮らす所だとは思ってはいない。

息子を船員としているのは、五〇代以上の人たちで、息子が島を出ると漁業を引退することが一般的である。しかし、親子・兄弟との乗船は、兄弟が各々生殖家族をもつと分裂することが一般的である。チバン間で一緒に操業するよりは、別々に操業する事の方が収入が良いからである。乗組員数と漁獲量は必ずしも正比例しない。片H氏の家は船を二隻所有しており例外的なものである。また、既婚の兄弟が船をともに操業するというケースは、島では一七組の兄弟がいたが一例もなかった。

このように、漁船経営者を中心にみると、一見親族間の生産に関する相互扶助は、極近親においても存在しないようにも見える。男性の父系親族の間では兄弟同士でも、主となる経済活動を共同することはなく、独立している。しかし、親族の機能が発揮されるのは、充足した状態よりも、問題が起こったときである。その親族の範囲は、男性を中心にした場合は、従来指摘されているように兄弟やいとこ程度である。しかし、女性を中心として展開されるネットワークは男性よりも広く複雑である。次にいくつかの家族で、漁業活動がどのような成員で行われているかを夫系、妻系、母系が存在している場合から考察してみる。

（二）生産活動と女性のネットワーク

朴J氏は、主流の朴家とは異なる派に属し、父系親族は四寸（いとこ）の未亡人家族のみである。しかし、朴家はこの父系集団から婚出した女性達、つまり妹や姑母（父の姉妹）、あるいは婚入してきた女性（妻や母）のネットワークによって支えられているといっても過言ではない。図2は、朴氏（ego）の父親の忌祭祀に集まる人々である。本来忌祭祀に出席すべき人は、4の家族のみであるが、五寸（図2の5）の妻6がキリスト教徒であったため、その一家は出席していない。婚出した娘やその婿が来ることも一般的であるが、この場合は、村内に婚出している娘2と他地に婚出している娘の婿3も参席していた。本来は出席する必要のない四寸ヌナ（従姉）7とその夫8、故人である姑母（父親の姉妹）の夫9とその息子10、すなわち姑従四寸も飲福に招待されていた。このように、祭祀をともにする堂内が少ない場合には、規則外の親族で補われる傾向は、この村でも同様である（嶋一九七八）。しかし、このメンバーは生産活動から儀礼にいたるまで、あらゆる場面において朴J家の行事に参加したり、扶助を行う基本的メンバーでもある。ただし、その係わり方は様々である。次に、朴J氏の事例を含めて、各々の立場の女性について考察していく。

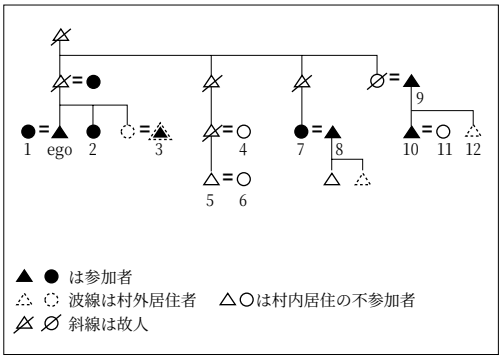

図2　朴J氏の忌祭祀

先述したように、C島は韓国の村落としては村内婚率が比較的高く、したがって、一村落内に外族（母方の親族）や姻族が多く存在することになる。このような条件がどのように女性たちの父系集団における立場に影響を及ぼしているのだろうか。

A　婚出した女性と親庭（チンジョン）（実家）

朴家の中で最も大きな労働力を提供しているのは、朴J氏の妹、こどもからみれば姑母（コモ）2である。

韓国では、儒教の規範の厳しいところでは「出嫁外人」といわれ、女は嫁げば婚家で良く務め、実家に気安く戻るものではないと考えられている。このような関係は、島内に婚家、親庭がある場合でも同様で、婚家との地理的距離はあまり関係がない。六四歳の女性は、結婚してからは名節のときに一回位実家に行かせてもらえたが、それ以外は滅多に行くことはなかった。「親庭だって他人だよ（chinjyong do nami yoo）」と姑には言われていたという。

日本に比べて里帰りが慣習化されていない韓国でも、近年では両親の誕生日、忌祭祀（法事）に戻ることは珍しくなかったが、里帰りは姑の決定権にゆだねられる所が大きかった。日常において、今日は舅姑の拘束力はそれ程ないが、図2の2も村内に暮らしていても、日用品の道具の貸借をしたり、家の門まで来て母親に声をかけていったり様子を見ることはあったが、特別なことがなければ家に上がって飲食を伴にすることはなかった。また、田植えの協同労働（プマシ）のメンバーにもはいっていたが、昼食の仕度などは祖先祭祀の準備と同様、普段は最も疎遠な朴J氏の五寸（図2の5）の妻6（従弟の息子の嫁）が手伝い、姑母2が手を出すことはない。つまり、家事は本来父系親族に婚入してきた嫁達の仕事と考えられていたためである。また、2の嫁ぎ先には姑がいたが、筆者がフィールドを始めた直後に亡くなった。しかし、その後も娘の実家に対するかかわり方に変化はなかった。婚出した女性と親庭の父系親族との関係は、婚家に舅姑がいるかどうかで、制御をうけるであろうことは容易に想像がつくが、夫方の兄弟、姉妹、近親がどれだけ周囲にいるかによってもそのかかわりは影響を受けていると思われる。実家に意味なく通うことはまわりからの監視や干渉を受ける。島では、時にはサドン間（婚家と実家の親同士）が幼なじみであったり、友人同士であることもあり得るが、女性にとっての日常の婚家と親庭のけじめ、あるいは舅姑との緊張感はそれによって影響されるものではない。

このように、婚出した女性たちは「出嫁外人」といわれ、実家と切り放された存在としてのイメージが強いが、姑母という立場は情緒的に、また実質的にも親庭に陰ながら援助をする重要な存在でもあった。主たる生業である漁業に関しては、朴J家では姑母2が手伝っていたが、全く無償のボランティアである。通常なら月三〇万ウォンの給与を支払うことを朴J家では節約することになる。また、姑母が外で作業をしていると、後に示すような多くのマシルクン（遊び仲間）が訪れておしゃべりしながら、ついでに仕事も手伝っていくので能率も倍増する。しかし、姑母の関与は固定化された定期的なものではなく、また、夫や夫の兄など夫系の近親、特に大家（クンチプ）が同じ漁業や農作業をしておらず、婚家の仕事に抵触しないことが条件である。普段も姑母は「ヒョンニム」と呼ぶ同婿（トンソン）（夫の兄弟の妻）と行動をともにすることの方が多い。親庭への労働力の提供は、姑母が自分の家の仕事を見計らいながら行うあくまでも個人的なものである。婚家に支障のない援助は孝行でもあった。

B　その他の近親の女性たち

朴J家ではシルチに関しては、五寸や先の祭祀に参加した姑従四寸（両者とも表5類型Bで水産業）、正確に言えばその妻たち6、11は生業に重複がな

くとも、姑母2のように積極的には漁業の作業に関与はしない。非日常的な冠婚葬祭や田植えの際の食事の仕度は、チバン（近親）にとっての大きな行事であるため、朴家に婚入した6は当然手伝うことを期待され、彼女も要求がなくとも援助を義務と考えている。父系親族ではない11は義務的関係にもない。一方プマシ（交換労働）に関しては、両者とも参加していた。

儀礼に関する扶助は、社会的義務的範疇にある人々が原則である。日常は親しい兄弟の嫁同士でも、夫たちは異父兄弟であるため、父系の親族が行う互いの夫の父の祭祀には無関心である。手伝いに行くことも要求がなければ行かない。逆に手伝うべき女性が来なければしこりが残る。一方、生産活動に関しては、兄弟以外そのような義務感もない。ただし、どの場合も、依頼があれば「情」として断ることは難しいし、人手が足りなければ援助する。また、近親の間では、頼まれればかなりの無理をする。したがって依頼する方も、相手の世帯の状況、負担も考慮して頼まなければならない。近年は、過疎化によって住民の年齢が拡散し、ファミリーサイクルの相違、家計における生業の位置の相違などを考慮することが必要で、兄弟間であっても気をつかう。C島では稲作は多くの世帯が自給自足のために、機械化よりもプマシによる相互扶助が互いに効率的であったため維持されていた。その際の労力の確保は親しい友達とともに近親が核となる。

一方、朴J氏が船の買い換えのため大金を借入したのは、商売でやや余裕のある姑従四寸（図2の12）と妹2の夫からである。誰に、何を頼めるかということに絶えず「ヌンチ（気配り）」を働かすことが要求された。

C　妻家チプと婚家（シヂプ）

しかし、最も気兼ねをせずに依頼者の意向が反映されるのは、婚出した娘による親庭への依頼である。例えば、船員が家族内にいない朴J氏は、同甲の友人（AとG類型の人）以外に、妻の父（類型H）、妻の弟に頼んでいる。妻弟は、ソウルの工場から給金が低いといって呼び戻された。彼らは人手が確保できず、苦肉の策としてかなり無理をして頼んだものである。韓国では「査頓（姻戚）と便所は遠い程良い」といわれ、姻族は遠くにいて干渉しないことが良いものといわれるが、C島では生産活動に関しては、妻家（チョガ）チプ（妻の実家）が労働奉仕する事例も多くみられた。しかし、妻家チプが娘の婚家（シヂプ）を扶助することがあっても、その逆はみられなかった。また、このように妻家チプが娘のシヂプに援助をしている事例は、妻家チプあるいは、婚家のどちらかが、親族関係が希薄な場合が多かった。

例えば片C氏は、片家の一員ではあるが、片家の成員とは日常ほとんど交流はない。両親は他地へ移住しており、最も近い父系親は一四寸になる。一方彼の漁業は同居する未婚の弟が船員になるが、乾燥作業のサポートをするのは妻家チプの両親たちである。妻の両親も未婚の息子と暮らしていたときは、息子とともに漁を行っていたが、息子が島を出ると娘のもとにきて作業を手伝う。

また、現在独居世帯となった女性も娘の嫁ぎ先でシルチの乾燥作業を手伝っていた。娘婿は、八寸内の親族が集中している朴氏で、兄もいるが、兄の世帯も同業者で、共同作業をすることはなく各々に操業している。娘の婚家には舅姑もおり、漁撈の作業以外に日常的に母が娘を訪ねることはない。しかし、姑たちがいなければ、特に未亡人などは、遊びに行ったり、食事をすることも度々あった。娘婿との相性もあるが、婿が丈母によくすることは、娘に代わる孝として期待された。例えば、C島の葬儀では、野辺送りの際に何度も棺の運搬を止めて、故人の親族に運搬者たち（島では

青年会）が金銭を要求する遊びを行う。ある葬儀では、ソウルからきた男性がお金を請求されると「俺は甥だ。婿がいるのだから、婿に出させろ」と叫んでいた。婚出した女性の夫も、妻の両親に貢献することを周囲の人間からは当然と思われていた。ある息子のいない老人夫婦のもとには、婿から使えといって七〇〇万ウォン送金してきたという。過度の妻家への支出は、舅姑のいる場合には摩擦にもなるが、婿の存在は、韓国社会においては意外に大きい。

D　妻家サリ（チョガ）

先の朴J家の忌祭祀の参加者で、漁業の作業に参加するのは姑母2以外には、婚出した四寸ヌナ、図2の7で、時にはその夫8も加わる。ただし、彼らの場合は定期的に雇用することもある。8が病弱なため、朴家での労働も彼らには重要な収入源である。朴J家にとっても、他者より確実に確保できる人材として、7、8とは相互依存的な関係にある。8にはC島に全く親族がおらず、いわゆる妻家サリである。妻家サリとは、自らの父系親族が多く居住するムラを離れて、妻方の親庭があるムラに居住することであり 女性から言えば、親庭のムラに戻ることである。先にみたように、現在居住する妻家サリの世帯は、土地の所有状況から言えば、特に優遇されているようでもなく、生活のレベルもそれ程高い方ではない。しかし、従姉は朴J氏の妹2とも親しく、2のもつ同婚（トンソン）間のネットワークの中に組み込まれてもいる。8にとって妻の親庭の役割をする朴家との関係は、5と朴J氏との間よりも親しい。妻家サリは、夫にとっては孤独なものでもあるが、妻家チプから婚家への援助でもわかるように、父系の近親よりも時には妻の実家が確実な助けになる。

四　拡大する「女の世界」
ー女性から見た親族ー

労働力も友人関係や雇用者ですむ場合には、妻方の親族に頼ることはなるべく避けられる。船で忙しく危険を伴う中で、丈人（義父）に対して、声を荒げることもあるからである。村内婚の全くない村落では、「親族間のプマシは、非常に近い関係を除いては、プマシの相手になるとは限らず、むしろ友人関係や近隣関係の変数が重要になる」としているが（金周姫一九九二）、調査地では、近隣関係よりは友人関係か女性を媒介として展開される親族関係が優先される。また、金周姫も先のような関係は、女性には当てはまらず、（夫方の村落に居住する）女性は、「友人」という言葉をあまり口にしないという。C島の中では、親族関係から無縁な友人関係も多くみられるが、情による親しい友人と日常における相互扶助の相手は、女性の場合必ずしも一致するとは限らない。

ところで、韓国の村落は、契（ケイ）というインフォーマルな組織があることで知られている。契は、日本の講のような互助組織であり、親睦組織でもある。幾つかのタイプに分類されるが、婚姻契、あるいは喪布（サンポ）契などといわれる冠婚葬祭の際の相互扶助を目的とするもの、親睦契、親友契、同甲（トンガプ）契といわれる親睦を目的とする契、米（サル）契などといわれ利殖を目的として行われるものなど様々である。何人かがグループを組み、月に一回あるいは数ヶ月に一回、定期的にいくらかの契費を持参して集まり、目的のために貯蓄する。当日は共食をしたり親睦を深めるものも多い。父系親族集団が族外集団に対して排他的、潜在的緊張関係を生み出す可能性があるのに対し

て、契は水平的な村落統合に大きな役割を果たし、異世代間の緊張をも緩和する機能があるとされる（伊藤亜人一九七七:297）。一方、重松真由美（一九八〇）が調査した常班意識の強い京畿道の村落では、女性も男性と同じような同姓意識が強く全体の親睦契が成立しない村であったり、全羅道の同じく同族村落を調査した金眞明（一九九三）は、男性達が同じ氏族であっても祖先の身分関係によって分裂しているのに対し、女性はほぼ全員が同一の契に参加し、事例村では女性が統合の役割を担っているという。契の組織の在り方は、村落構造によって差異が生じると伴に、男女による差異も見られる。C島の中では、男性達の親睦契は、全く異姓の同年齢者で構成される同甲契、親睦契がある一方で、女性によって形成される親睦契は、年齢層も広く、姉妹、トンソやコモ、シヌイ・オルケなどのいわゆる「女の世界」（重松一九八〇）を媒介として形成されているものも多い。

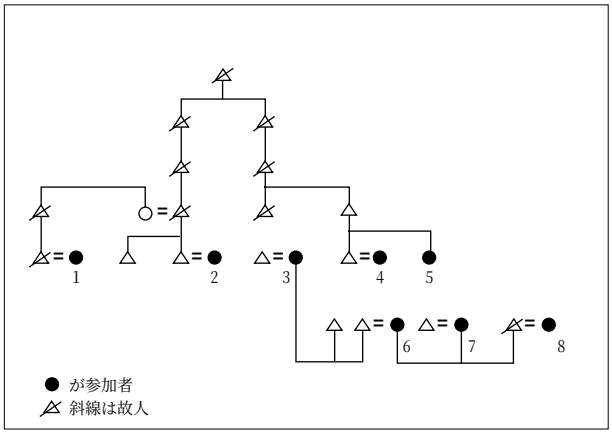

図3　親友契

図3は、女性による「親友契」という親睦契を形成する主たるメンバーを親族関係から著したものである。このほか四人の女性が加わっているが、ほとんどが朴家に婚入した女性あるいは、朴家から婚出した女性が中心となるいくつかのグループが結合してできている。また、「親友契」といってもその年齢は、四〇歳～五一歳とかなり広く、この年齢層で契に加入していない人は、村内に一五人おり片家や他姓が多く、朴家に婚入した人はいない。片家の女性達が中心となった別の同甲契（三〇歳～四九歳）もある。これらの契からみると、女性達は男性と同様、極年齢の近い友人をもつこともあるが、「男にとっての親しい友人がいとこ」である可能性があるのと同様に、夫のチバンの中に友人や遊び仲間（マシルクン）を見いだすことも多いのである。

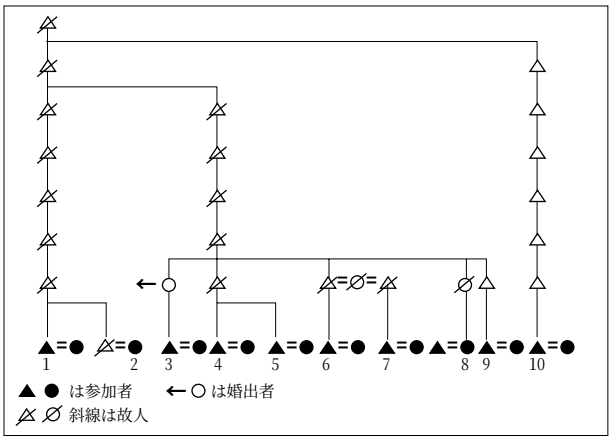

図4　片家のトンジカン契

また、男性たちによる契、あるいは先のプマシもその女性を媒介にいくつかの親族・姻族が結びついて形成されているものもある。例えば、図4は、片家の人々の「同志間（トンジカン）契」である。近年親族が減少したため、もっと親睦を深めようと一二年前にはじめられたものである。この中には、本来は片家でないものも含まれている。7は6と異父兄弟であり、母が片家の

夫が死亡後再婚した金家であるが、7の父親も早くに亡くなり片家の一員として日常も親しいメンバーに入っている。8の母は6・7の母親のシヌイ（夫の妹）にあたり、離婚後8を連れて親族の多いムラに戻ってきた。夫の異父兄弟もいるが、6・7の母を介した関係から日常生活、また契なども片家のメンバーとの方が親しい。3は非主流の朴家で母親が、4～9の姑母である。3から言えば母方の親族（主にいとこ）との親睦会に参加していることになる。五寸の叔父はキリスト教信徒であり祭祀を共同でおこなうこともなく、日常の往来も母系の片家の同年齢の親族とのつきあいが多い。また、1・3・4・6～9は普段から往来も多く、この婦人達の何人かで先にふれた同甲契も作っている。また、1のプマシには7～9と更に9の妻弟、7の妻（図2の2）の従姉（図2の7）も含まれ、兄嫁（図4の2）の弟が更に加わっている。いくつかの普段密接なメンバーが、重なり組み合わされていくつもの契を形成することが多いが（伊藤亜人一九七七参照）、C島ではプマシも同様である。ある一グループあるいは、一組のメンバーがいくつかの同じ契やプマシに参加している場合があるのである。C島では、片家のグループや図3の3・6・7・8は、6・7の姉妹が中心となって6のシヌイである3の世帯、弟の未亡人である8や夫の小家（チャグンチプ）とプマシや契を組むことが多い。6・7の夫は島には近親が少なく、夫同士の年齢も近いことが反復的な関係を生み出している要因とも思われる。

図4の片家後孫派に対して直孫派に属し、先のグループとは時祭も別で日常のつきあいもない片Y氏（五九歳）のプマシには、寸数は離れているが同じ直孫派の若者二名と、妻方の甥（朴家）とその甥の普段仲の良いチバンから五人参加して行われた。

このように、C島では女性達は、婚家・親庭のあらゆる関係を駆使して日常生活のサポーターを確保している。ただし、夫の親族における同婿を越えた婚入者たちの連携は、父系親族の密度が薄い姜家ではあまりみられないことから、男たちの関係も影響していると思われる。また、女性達はいくつかの姓氏の男性たちを結びつける結節点となっているが、それは主に婚出したシヌイ（夫の姉妹）であり、図2の朴J氏の妹2のように、子ども達から見た姑母を媒介としたものが多い。

C島では還暦を迎えた人が、亡き両親の変わりに姑母をすわらせて大礼をする場面や、婿が名節のあいさつに来て、丈母（妻の母）である自分を差し置き先に姑母の家へ行ったと立腹している女性の言説からも、姑母が重要な存在であることが推測できる。子ども時分にかわいがってくれた姑母の存在はイモ（母親の姉妹）よりも大きい。ただし、後の事例からみると感情的には、姉妹のつながりは男兄弟以上に大きいが、生活のなかで孝の実践として、兄弟のいる実家へ行くことに比べ、姉妹と接触する機会は、ムラ社会においては更に制限され、結果的に顕在化していないだけかもしれない。また、C島では村内婚が多かったが、姉妹がともに村内に嫁いでいたのは、図3の6、7の一例のみであった。

一方、夫系親のなかでミョヌリ（嫁）が舅姑とともに最も気を使うのが、夫の姉妹（シヌイ）である。近年の農村社会では、生業における女性の労働時間が増長し、姑婦関係の葛藤は協力関係に変化しつつあるといわれる（趙玉羅一九九三）。C島でも三〇～四〇代の嫁達が外の仕事をするのをサポートするのは姑たちであった。嫁不足もあって姑達も嫁には気をつかっていた。しかし、シヌイとオルケ（兄弟の妻）の関係には依然緊張感があった。儒教の規範のきびしいところでは、嫁であるオルケは、義弟や義妹にも敬語を使う。ムラでは日常は一般的な年齢の秩序によって敬語は使用されたが、

特にオルケはシヌイに対して気をつかう。島では、シヌイ・オルケは国民学校（小学校）のときに、先輩・後輩であったり、遊び友だちであった可能性も大きい。韓国では一般に他人であっても親しくなると年長のものを「オンニ（お姉さん）」と呼び、年長者も年下の者の世話をやいたりして親しみのある関係を作ろうとする。しかし、村の女性たちは、お互いがシヌイとオルケの関係になるとそのような親しい関係を意識的にやめて、秩序をたもつという。シヌイは特に親が存命中は、親が良く世話をされているかとか実家の様子を監視するような存在でもあり、オルケが特にそのような存在として意識する。一方、オルケが兄嫁の場合は、婚出した女性（シヌイ）にとっては両親の亡きあと親代わりのような役割もする（重松真由美一九八〇）。また、年齢を重ねると親しい関係として幼い頃の友人関係にかわって「マシル」の仲間にもなる。特に大家族制の中で長年過ごした高齢のオルケとシヌイには、そのような傾向が強い。

このように、女達は、時には婚家で、時には実家のネットワークをふるに展開しながら生活していた。図5のお婆さん（ego）は、夫が亡くなり一人暮らしとなる。本人も他地出身で、夫の父系親族はすでにすべて他地へ出ていない。夫の葬式は、他地に婚出した娘の婿たちが準備した。一方、商売をしていた店の片づけからすべての事後処理をしてくれたのは、ハルモニの「姨母7（母の姉妹）の家8」と、「姑1の甥の妻3」である「姑1の親庭」である。「一家」だからといって4が手伝ってくれた。一般に、「一家」といえば、男性にとっては父系親族集団をさすが、女性にとっては、父系・母系・夫系あらゆる関係を含める。また、ハルモニの言説に象徴的なように、女性をとりまく社会関係は、夫方であれ、親庭の関係であれ、女の系譜として認識されている。姨母の家は、本人にとっては「姨従四寸の家」であり、姑の甥の家であると同時に「夫の外四寸」でもある。しかし、女性にとっては、姨母や姑を通して培われた関係として認識されているのである。

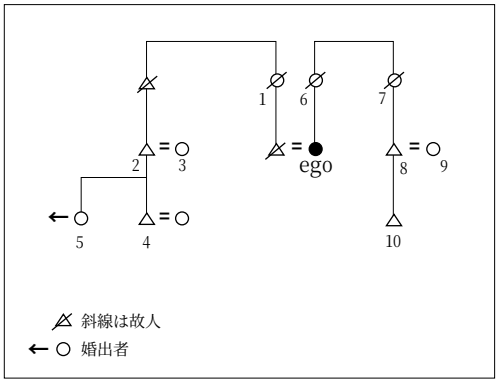

図5　女の一家

五　おわりに

本稿の事例村は、他村に比べて例外的に村内婚が多いため、すぐに一般化することはできない。しかし、現代社会でも姑母、すなわち、男性が自らの姉妹に子どもを預けて夫婦で留学していたり、都市でも姉妹の夫同士が「同婿契」を作ってよく集まるという友人の話を聞いたことがある。このような女性を媒介にした関係は、日常生活の中でも散見され、女性を中心に記述することで、異なる社会関係を見いだすことができるようにも思う。

これまでの韓国の女性は、「出嫁外人」としての父系社会から疎外された側面が強調されてきた感がある。儀礼における男女が注目され、祖先祭祀集団の周辺にいる女性として位置づけられたためである。しかし、C島の村落のなかでは、女性は、儒教的な規範のなかでも男性以上に広い社会関係を構築し、労働力を集約する大きな力になっていた。労働力は近代社会

の家事労働のように、金銭には換算されず、社会的に評価されることは少ないが、生活の中では大きな役割を果たしていた。また、老人世帯や労力の少ない世帯は、女性の連帯によって支えられているところが大きい。過疎化の中でのムラの解体の様子をみると、父系親族のみが中心となっているところより、母系・妻系の関係があるC島は他村に比べて養殖漁業などの権利の分配において、モラル・エコノミー的な側面が強いようにみえる。韓国村落社会の過疎化の様態に関しても、このような視点から今後も注目していきたい。

（注1）一九九一年の家族法改正により、長男の戸籍上分離・独立、他家への養子が可能となり、相続も既婚、未婚、男女を問わず平等となった。

（注2）例えば嶋の調査した全羅道の農村では、七四年から九〇年の一六年間で、戸数にして二五％、人口で六〇％減、朝倉の離島農村は、世帯数で二〇％、人口にして四四％減(朝倉敏夫・嶋睦彦編一九九八)、筆者が調査した東海の漁村では、世帯数三〇％、人口は七四％減少している。

生業に関しては、拙稿（一九九八）において詳述したことがある。本稿では、紙面の関係上社会関係のみに焦点をあてたため、拙稿も参照していた頂ければ幸いである。

（注3）船を息子と同船している男性は、引退する理由に、息子が船でたばこも吸えないのでは気の毒であることをあげている。また、親族の祖先祭祀の直(なおい)に招待されていて、父親が現れた途端、そそくさと他の部屋へ移る息子の姿など、父子間における緊張関係も強い。

参考文献

朝倉敏夫・嶋睦奥彦編一九九八『変貌する韓国社会』第一書房

伊藤亜人一九七七「契システムにみられるchinhan-saiの分析」『民族学研究』四一―四 pp.281～299

一九八七「韓国の親族組織における〝集団〟と〝非集団〟」『現代の社会人類学I』pp.163～186 東京大学出版会

嶋睦奥彦一九七六「堂内（chib-an）の分析―韓国全羅南道における事例の検討」『民族学研究』四三―一 pp.1～17

一九八〇「韓国の『家』の分析―養子と分家をめぐって」『広大アジア研究』二号 pp.39～52

R.L. Janelli & D.Y. Janelli 1982 Ancestor Worship and Korean Society Stanford U.P.

重松真由美一九八〇「賽神にみられる女性の社会関係」『民族学研究』四五―二 pp.93～110

鈴木文子一九九八「相対的貧困感の時代―八〇年代末の離島社会―」朝倉敏夫・嶋睦奥彦編『変貌する韓国社会』pp223～259 第一書房

末成道男一九八四「韓国の社会組織」竹村卓二編『日本民俗社会の形成と展開』pp.101～123 山川出版

崔在錫 一九七九『韓国農村社会研究』学生社

V. Brant 1971 A Korean Village : Between Farm and Sea Harvard U.P.

本田洋 一九九四「韓国家族論の現在」『朝鮮学報』第一五二輯 pp.109～166

一九九八「韓国の社会変動と家族―父子関係を支える社会経済的基盤の変化とその影響を中心に―」 黒柳春夫他編『父親と家族』 pp.196～226 早稲田大学出版部
李光奎 一九九七『韓国社会の構造』高志書院
（以下は韓国語）
李光奎 一九七五『韓国家族の構造分析』一志社
任敦姫・一九九五「韓国農村家族の変化―ネアリマウルの場合―」R.L.Janelli『比較民俗学』一二輯 pp.25～41
金貞明 一九九三『束縛の中の韓国女性』集文堂
金周姫 一九九二『プマシと情の人間関係』 集文堂
金周淑 一九九四『韓国農村の女性と家族』ハヌルアカデミー
金宅圭 一九六四『氏族部落の構造研究』一潮閣
崔在錫 一九八八『韓国農村社会変動研究』一志社
ピョンファスン 一九九二『農村家族の変化と持続に関する研究』ウォンヨンエ・チェウンヨン 韓国女性開発院
文玉杓一九九三a「農村家族と農村女性―韓国農村家族の変化と女性の位置」『韓国の社会と文化』第二一輯 pp.281～310 韓国精神文化院
一九九三b「近郊農村の家族および衣食住生活の変化と女性の役割」文玉杓他『近郊農村の解体過程』pp.117～151 韓国精神文化院
鄭昌秀・鄭基善・一九九七『産業化過程の韓国家族の実態と展望』車鐘千 集文堂
趙玉羅 一九九二「農民家族と都市貧民家族における女性の経済活動に対する比較研究」『韓国文化人類学』第二四輯 pp.67～94
一九九八「農民家族の現代性と保守性」『韓国文化人類学』第三一―二輯 pp.377～405
朴富珍 一九九二「空間利用を通してみた家族関係の変化―韓国の農村家族を中心に―」『韓国文化人類学』第二四輯 pp.31～65
一九九四「転換期韓国農村社会の家族類型」『韓国文化人類学』第二六輯 pp.157～201
韓ギョンエ 二〇〇〇「出ていった長男、残った長男―ライフコースの観点からみた農村老人の居住類型決定要因」『韓国社会学』第三四輯 pp.649～669
尹スンドク